

2DB
MILITARY

玩具に
ランクアップ

金髪ド
女の
女上官の

新居佑

挿絵
もり苔

新米
兵士
から

試し読み版

第一章 ドSな上官の、射精管理拷問!?

第二章 童貞卒業！ でもこれって逆レイプ!?

第三章 露出射精訓練で、マジイキ!?

第四章 ソープパイズリフェラは、最高！

第五章 孕ませセックスは正義！

006

073

121

183

219

登場人物紹介

ナターシャ・シロフスカヤ

圧倒的な美貌と戦闘能力を持つ、金髪蒼眼の少女。皇国軍遊撃魔法中隊・隊長を務め、性格はD S。周囲から「殲滅の魔女」と呼ばれ恐れられている。

アレク・ストロエフ

好待遇につられて入隊を志願した黒髪の青年。童貞。ある日ナターシャに目を付けられ魔法中隊へと転属を命令される。



「そら、そらそら……そおくらあ♪」

ナターシャは、まるで自分の掌で肉棒を扱っているかのように、悦に入ったりリズムカルな上下動で、オナホールを動かしてくる。

視界が遮られた中、感覚が勃起チンポに集中し、感度が普通の何倍にもなっているような気がする。

しかも両手両足を、恥ずかしい格好できつく拘束されたままだ。拷問に耐える特訓ということで、泣き言や反論すら許されない。

初めての女性によるチンポへの刺激が、完全なる女性上位で行われていることに、男としての矜持きんけいが強くなるが、同時に背筋をゾワゾワとした、妙な快感が駆け巡っている。

「お前のチンポは正直だな。こんな格好だというのに、まだまだ固く大きくなるぞ？ 気持ちいいのか、特務兵？ 女のわたしに……っ。ああっ♪ 敵であるわたしに勃起チンポをオモチャで扱かれて、気持ちよくてたまらないのかっ？」

「くっっ、き、気持ちよくなかない！ 俺は、絶対にこんなものには屈しないっ！」

ナターシャを上官ではなく、敵の女拷問士だと思い、強い口調で返すアレク。しかしその実、彼の下半身は、その性欲を引き返せないところまで、刺激され続けている。

ジユクツツ！ ヌチユツツ！ ジユチユジユチユツツ！

(くつつ、ふうつつ。やばい。めちやめちや気持ちいいぞ、このオナホールつつ！い、いや、この女の……ナターシャの扱き加減が最高なんだつ。あ、くうつ。裏スジを重点的に責めながら、絶妙に上下させて、俺を焦らしてやがるつつ。くそつ、このドS上官がああつつ！)

気持ちとは裏腹に、アレクのチンポはこれ以上ないくらい、太く勃起している。

こちらは目隠しで見えないが、ジユクジユクと、オナホールを扱いているナターシャからは、半透明の淫具に包まれていながらも、肉茎の血管の充血具合がはつきりと目に見えているはずだ。

小動物のようなナターシャに、大の男が、逆に掌で遊ばれている恥辱感。

本当に拷問……いや、女性完全上位の調教を受けているかのような気分させられていく。

ジユチュジユチュツツ！ヌプヌプツツ！ジユジユチュウウツツ！

「はあ、はあつつ。う、くうつつ。あ、ううつつ」

(こんな恥ずかしいのに、くそつつ。ヤバいくらいに気持ちいいつ。足が震えて……俺、この女に弄ばれてる？うおつ、今度はそこまで……ううううつ)

椅子に縛られたアレクが、ビクンツと半脱ぎの上半身を震わせる。

チロチロ……ペロペロオオツ。

ナターシャは、その小柄な身体をよりアレクに密着させ、露わになって乳首に舌を這わせると、チロチロと、まるで子犬のように……しかし明らかなSっ気をもって、舐め始めたのだ。

「どうだ？ 目隠しをされたまま乳首を舐められると、気持ちいいだろう？ 男のくせに、こんなに乳首を固くして……。恥ずかしいとは思わないのか？ 相手は無慈悲なテロリストで女。皇国の軍人は、変態DMの集まりなのだなあ」

自分も皇国の軍人だというのに、どの口がそんなことを言うのか、と反論したくなかったが、実際、ナターシャの責めには、アレクすらも知らなかった、自分の秘めた性癖をさらけ出されてしまうかのような、恐ろしく、屈辱で、そしてどこか、解放的な快感すら伴う、イケナイ感覚に陥ってしまう予感すらあった。

なによりオナホールによつて扱かれて続けている、勃起チンポの快感の高まりが、もう切実だ。

（やばいっ。中隊に入ってからこの方、オナニーする時間も体力もなかったから。溜まりまくってて……。はあはあ、上がってくる。溜まりに溜まった精子が……。くうっ、チンポの奥で湧き上がろうとしているっ！）

久しぶりの男の快楽が発露しようとする感覚に、アレクは必死に抗おうとした。別に魔法のことさえしゃべらなければ、射精しようが問題ないはずだが、男としてのプ

ライドが、女性に……しかもこんなドSの少女にイカされることをよしとしない。

「おおつ、ド変態の肉棒が、ビクビク震えて……。これは限界、というやつかな、特務兵？ さあ、気持ちよくなりたいだろう？ 女のわたしの前で、浅ましい男根から、はしたないザーメンを思い切りぶちまけたらどうか？ ならば吐け。お前たちが使う魔法。その秘密をっ！」

シコシコシコつつ！ ジュクンジュクンツツ！ ペロペロレロオオツツ！

「う、あつつつ！ くふううつつ！ 誰が言うものかつつ！ 俺は誇りある皇国の軍人だつつ。快樂などに負けるわけにはいかないんだよつつ！ う、くううつつつ！」

（ありえねえ。こいつ、さらにオナホールを激しくつつ。それになんて汚い言葉遣いだ。見た目可愛いんだから、もうちよつと控えめにすれば……。うくうつつ。でも、うま、いいつつ！）

これが、ドSがもつイジメの本能というべきなのか。

ナターシャは、オナホールのストロークの距離、そしてリズムを短くし、裏筋、そして雁首という、亀頭付近、男の快樂神経の中樞を、ここぞとばかりに徹底的に責め始めたのだ。

しかもアレクが女免疫ゼロの童貞チェリーであることをあざ笑うかのように、より身体を密着させ、舌先だけでなく、その柔らかい女肉すらも、露わになった胸板に触れさせて

くる。

初めての女性のボディタッチは、アレクの肉棒への快感をさらに高め、乳首まで、固く勃起しているのがわかってしまう。

「まるで女の乳首のようだな、特務兵？ わたしに舐められると、ほら。レロオオッ。ちゅぶっつ、んちゅっ、チロチロ……んふっ、小豆のように固くなって、かわいいものだな。もっと苛めてやりたくなるよ」

言うが早いか、オナホールを握ったナターシャの力が強くなり、再び亀頭から玉袋までの長く、そしてゆつくりとした、じわじわ快感が滾るたぎようなストロークに変わる。

ジュルジュルツツ。ヌチュヌチュっつ！ ビクビクンツツ！

「ふぐっつ、くうっつ……あ、おっ、うくうううっつ！」

「チンポの方も、オナホール越しに、熱いのが伝わってくる。変態ドM男め。このジュクジュクという、いやらしい音が聞こえているか？ これがお前のチンポが悦ぶ音だ。ああ、なんとという情けなくていやらしい音なんだろうな。お前は正真正銘のドMだ。さあ、ザーメンと一緒に、魔法の秘密もぶちまけてしまえっつ！」

今度は、半ば力任せに亀頭付近を積極的に責め続けられ、陰囊から熱い精液の塊が、もう我慢できない領域まで上がってくるのが、アイマスクをしていてもはつきりとわかる。
（あ、うおおおっつ！ やっぱりこいつ上手いっつ！ だ、だめだ。射精するっつ。女の

上官に、ナターシャの前で、思いっきり濃いやつをぶちまけてしまおうっつ！)

アレクの腰が、グンツと浮く。

両腕を後ろで縛られ、両脚などは、恥ずかしすぎる大の字開きで拘束されているはずだ。視界が遮られているだけに、実際よりもはるかにいやらしい自分の姿を想像し、悔しいことにそのすべてが、自慰など比べ物にならない、ゾクゾクした快感に変わっている。

「さあ、出せっつ！　しゃべれっつ！　己の無力さ、変態さを詫びながら、わたしの前で射精しろっつっ！」

胸板の前で乳首を舐める彼女の吐息が、ハアハアという熱いものになっていく。拷問役らしく、ナターシャもテンションが上がってきたのか、戦場での訓練のように、喋りが熱を帯びてくる。

その感覚が、偶然にもアレクに、これまでの訓練でナターシャに叩き込まれた軍人としての矜持を思い出させる。

「……い、いやだ。絶対に秘密はしゃべらないっつ。たとえ射精させられたとしても、俺は皇国の軍人だっつ。くうっ、俺を仕込んでくれた上官のためにも、絶対に屈しはしないっつ！」

自分でもなにを言っているのかよくわからなかった。

散々、きついめにあわされてきたナターシャに対する意地ならわかるが、ナターシャを

擁護するような意見が、とつさに口から出るなんて。

その言葉は、ナターシャも意外だったらしく、一瞬だが責めの手がわずかに弱くなり、声が若干上ずった。

「……ほう？ 上官に対する恩か。駄犬にしては、忠義なことだな。しかし……っ」

さすがは軍人家系のエリートだ。動揺もつかの間、オナホルの動きは、その速さといじらしさを取り戻す。

グチュグチュグチュツッ！ と先走り汁がオナホルの中で溜まり、混ざりあいシェイクされる、とんでもなく卑猥な音が、鋭敏になった聴覚に響いてくる。

「くあっつ、う、くううううっつっ！」

（だ、ダメだ。もう限界だっつ！ ザ、ザーメン出るっつ！ で、でも……それだけだっつ！）

女の敵兵に性的に屈するという恥辱を与えることで、心までも折れるのではないかというナターシャの童貞いじりだったのだろうが、アレク自身の中には、すでに皇国軍の兵士としての誇りが、芽生え始めていた。

そしてその種をまいたのは、他でもないナターシャだ。

ナターシャのドS責めに屈したくはない。

と同時に、一人前の兵士としての道筋をつけてくれているナターシャのためにも、快樂

に屈したくはない……そんな複雑にブレンドされた気持ち、アレクに、敗北の言葉を口にするのをためらわせる。

「くうつつつ、うつつ……うううつつつ！」

腰とチンポをビクビクと震わせながらも、口を真一文字に閉じて、決してしゃべろうとはしないアレク。

その姿に、ナターシャは感心したかのように呟いた。

「やはり面白い奴だな、お前は。上官のため……か。ふふ、ではこれならどうだ？」

ナターシャの手の動きが速くなり、刺激された淫茎から、熱い精液がこみあげてくる。もう射精を止めることなどできない。しかし決して魔法の秘密は話さない。そうアレクが思ったとき。

「……つつつ!! んんつつつつ、な……つつつ!!」

ふいに目隠しが外される。

てつきりナターシャが、自分が射精する情けない姿を見せつけるためなのかと思ったが、現実はその以上にハードだった。

「な、なんだこれつつつ!! 俺のチンポがつつ。しゃ、射精できな……くううつつつ！」

信じられないことに、いつの間にかアレクの膨れ上がった巨根の根元が、魔法でつくられたとおぼしき、細くも頑丈な紐によって、きつく縛られていたのだ。

「お前の上官に対する熱意にほだされてな。お前の射精を封じてやったのだ。さあどうする？ 魔法の秘密をしゃべれば、チンポの封を解いてやる。皇国に、上官に対する忠を貫いている限り、お前は絶対に射精できないぞ？」

信じられないことを言う女だと思つた。

男同士の笑い話として聞いたことはあつたが、ドS女による射精管理——正直、これはヤバすぎる。

「くっ、は……っ。うくっ。あ、んんっつっつ！」

アレクの息がだんだん荒くなつてくる。

「ふふっ、お前のチンポは涙ぐましいな。ご主人さまが敗北を認めない限り、絶対に射精できないというのに……。ほら、見えるか変態男？ チンポがこんなにビクビクと震えて……。先走り汁だけをプシュプシュ噴出して……。ああ、無様だな。たまらないぞ、まったく♪」

ナターシャの言う通り、アレクの勃起ペニスは、行き場を失つた大量のザーメンを、どにかして吐き出そうと、先端から根元までを必死にビクつかせている。

肉茎を走る血管は、破裂するのではないかと思えるほどに、太く熱く充血しており、まるで限界寸前の水風船のようだ。

「はあはあ……い、言わないつて言つただろ？ くっ、このドS女がつっ！」

ナターシャが敵役であるということもあり、ここぞとばかりに毒づくアレク。



(……まったく、相変わらざる確かつ恐ろしい指示だぜ。これじゃ気を抜く暇なんかありやしない)

アレクはそう心でこぼしながら、壊れた建物の柱に身を隠し、立ったまま、スツとライフルを目標に構える。

アレクが握っているのは、通常のアサルトライフルのフレームを再設計した狙撃銃だ。射程はゆうに二キロを超える。

それを扱うアレクの任務は、長距離からの隊の援護である。

現在の目標は陸を走る巨大鳥型ロスト。ダチヨウとクジャクを合わせたような、体高三メートルを誇る危険度Bのダミー機械獣だ。

基本的な攻撃は、軍用車両すらも破壊する突撃力と、口からの火炎弾。

弱点は胸の冷却装置で、そこを破壊すれば、自らが発した熱によって、自爆を誘発できるはずだ。

幸い、こちらにも、先行している隊にも気づいていない様子はない。

ロスト自体は、その名のとおり、古代ロストテクノロジーの塊である。

そのため、ダミーロストとは、あくまで敵の外見、そして行動パターンを再現したものだ。

しかし相手は、ナターシャの軍への要望により、以前より格段に精密に再現されたダミ

ーだ。

相手の動きに明確な規則性は見られず、こちらが仕留めそこなえば、胸ポケットに付けられた、一種のお仕置き装置から、強烈な電撃が流れるようになっていく。（もちろん、これもナターシャの発案だ）

第一陣として訓練に赴いた隊員たちのほとんどが、その恐怖の電撃装置の餌食となり、大半が即キャンプの医務室送りにあっている。

「さて、次はアレクがいる第二隊か。それではその腕前を示してもらおうか？」

「イエスマムっ！ ロストを隊には近づけさせませんっ！」

金髪の上官に返事をし、集中力を高めていくアレク。

構成するのは、強力な貫通力を弾丸に付与する攻撃魔法。

まるで超大型のダチョウのように、気ままに動きながら、索敵を行っているロストの胸部を、よく狙う。

その距離、一キロ弱。

（こいこいこい……今だっ！）

敵がこちらに胸を向けた瞬間、アレクは引き金を絞り、ダンツと魔力弾を発射する。

ヒュイイイイ………。ドギョーンツツツ！

「ギ、ギギイアアアアアツツツ！」

超高速で風を切って飛んだ弾丸は、狙い通り敵の胸部を撃ち貫き、見事破壊判定が表示される。

味方からは無線で感謝の意が伝えられ、アレクもそれにこたえる。

「……ふううっ」

「ふっ、だいぶ上手くなつたな。魔力の密度も、構成力も上がっている。お前のマナは確実に向上しているぞ、なあ、アレク？」

「イエスマムっ。特佐直々のご指導の賜物でありますっ！」

響いたナターシャの声は、しかしアレクが持つ無線から響いてきたものではなかった。

上空にはたしかに軍服を着たナターシャの姿があり、二人の距離では無線なしでクリアに受け答えできるはずがない。

「当然だ。なにせ他の連中とは違い、わたし自らが……あ、んふっ、こうして四六時中、個人レッスンをしてやってるんだからな」

「くあっ、はっ、はいっ特佐っ！ こ、光栄の至りですっつ！ ああっ、くふうっ。あっ、ふあ、ああっ！」

アレクはナターシャの声に答えながら、切なそうな声とともに、地面を踏みしめている両足をブルルッと震わせた。

（あ、くうっ、この女……だんだんやるのがエスカレートしてきやがって……。ああう

っ、こんなの、隊長のやることかよ……っ)

アレクは心の中で毒つきながら、視線を自分の股間へと移した。

「ふふっ、なんとというチンポだ。ビクビクとうれしそうに勃起して……。ああっ、先走り汁も濃いぞ。訓練中にチンポを弄^{いじ}られて、興奮しているのだろう、アレク？」

そこには、なんと上空でみんなを監視しているはずのナターシャの姿があった。

その格好は、軍服こそ着ているが、上半身は片側だけはだけけており、あろうことかナターシャの小ぶりのおっぱいが露わになっている。

ふるんと柔らかそうな乳房、その先端の乳首はツンツと固く勃起しており、鮮やかなピンク色の肉豆が、ピクピクといじらしく震えている。

「はあっ、んふっっ。乳首の先がジンジンくるぞ……。っ。自分のものとは思えない……。ああっ、ほらアレク？　これが女の勃起乳首だ。並の女たちよりは小さいかもしれないが、こんなにはつきりと見たのは初めてだろう？　ふふっ、ああんっ。んんっっ！」

そうアレクを煽るナターシャの格好は、あろうことか男の欲情をそそりまくる、魅惑的ながに股スタイルだ。

いつもピンつと背筋を伸ばしている印象しかない、ある意味きちつとしている金髪上官。それが、すぐ眼下で両脚をガバツと開ききり、その肉付きのいい太ももとふくらはぎを、ムニュウツとくつつけあって、いやらしく腰を落としている。

ワンピースの軍服は、淫らにめくれ上がり、そこから覗く女性の性器の中心点……魅惑的な股間には、きつく切れ上がったショーツが、はつきりと見える。

そこにはジワアつとした、女のラブジュースがじつとりと滲んでおり、ムンツと広がる女の発情臭は、乾いた戦場の汗臭い空気を、この一帯だけかき消してしまっただかと思えるほどに、アレクの鼻腔を誘惑し続ける。

「じゅるつつ、んちゅつつ。おつ、ああんつ。むふうつ、じゅるじゅるつ。んはああんつ。ああつ、またビクンツと震えて……。なんとという敏感なチンポなんだ。しかもこの溢れ出るマナ……。こんな状況でチンポをおつ立てて……。わたしのオモチャは最高のDMだな」
「イ、イエスマムッ。じ、自分は……。くつ、特佐にチンポをしゃ、しゃぶられて……。訓練中だというのに、チンポをフル勃起させていますっ！」

（く、くそつ。こんな恥ずかしいことを言わされてるのに……。ああつ、こいつの言う通り、チンポが勃起して……。き、気持ちいい。ああつ、ヤバイ。チンポを弄られると……。て、抵抗できねえっつ！）

アレクの魔法士としての潜在能力を引き出すには、極度の快感射精を大量に経験することで、精液に眠るマナの扱いを身体に覚え込ませるしかない。

その結論にたどり着いたナターシャがアレクに命令したのは、野外……。しかも他の隊員たちとの共同訓練中でのチンポ訓練だった。

上空のナターシャは、彼女が魔法で作り出した偽者であり、遠隔操作しているダミー映像だ。

本物は今こうして、アレクの足元にがに股で座り込み、むき出しの勃起ペニスを、自らの口の中に含んで、しゃべっている真っ最中である。

「んふっ、じゅるっ……。あ、ああつ。ふふっ、いくらわたしが迷彩魔法を、わたし、そしてお前のチンポにかけていると言っても、他人に見られるかもしれない状況に変わりはないのだぞ？　なのにこんなに堂々とチンポを大きく……。んぶっ、じゅずりゅうつ。あはあつ、ふふふっ、気持ちいいか、アレク。ああ、なんて素晴らしいオモチャだ」

自身にかけて完全迷彩魔法によって、アレク以外からは視認できなくなっているナターシャが、さも楽しそうに話しながら、膨れ上がった皮剥き亀頭を下から上へと、涎をたっぷりつけて舐め上げる。

「くふううつつ！　イエスマムツ。あ、ああつ。チンポの先は……。裏筋はキク……。つ。お、ああつ、んくううつ！」

ペニスをしゃぶるなど、まるで未経験のはずなのに、ナターシャはその鋭い雌のドS本能のせい、アレクが感じる部分を的確に舐めしゃぶってくる。

マゾの快感に目覚めたアレクと同様、ナターシャもまたサドの性的快感に、はつきりと目覚めてしまっている。

「じゅるるっつ。れろれろおおっ。んふううっ。やはり裏筋が一番弱いようだな。ふふっ、しかしそうは簡単に射精させんぞ。もつといじめてやる。いじめられ、焦らされることで、お前の才能は花開く。ドMの快感が高まっていくのだからな、アレクよ」

言ったナターシャは、あくんと、大きく口を開くと、あろうことかアレクの勃起肉棒を、その開いた口で、一気に根元まで呑み込んだ。

「んちゅううっ。むふううっ。んんっつ！んふふっ。じゅるううっ。じゅぞぞっつ。ちゅるちゅるうううっつ！」

「く、おとおっ！の、喉までチンポが届いて……っ。あ、ああっつ。くふっ、んんあっ、あっつ、あああっつ」

今は訓練中、隊のスナイパーであるアレクは、すぐに次のターゲットを狙わなくてはならない。そう頭でわかっているにも、股間から湧き上がる、野外フェラの快楽に、思わず悦びの声を漏らしてしまう。

「ふふっ、いい声だ。気持ちよくなっても、射撃をおろそかにするなよ？チンポで感じる快感。それによって溢れ出るマナをコントロールするんだ。そら、もつと気持ちよくなってやろう、ふふふ♪」

常人よりはるかに大きいアレクの勃起男根を啜えたことで、初めはわずかに苦しそうな顔をしていたナターシャ。

しかし、すぐにアレクの極太チンポに順応し、いじらしい上目遣いを見せながら、実にいやらしく逸物をしゃぶり立てる。

「んじゅるぶっ！　じゅぶっ、んはあ……っ。ふふ、だいぶ固くなってきたな。ほおら、アレク。乳首だけでは物足りんだろう？　わたしのマ○コ……んんっ、オナニーするところを見ながら、もつと興奮するがいい……っ！」

言ったナターシャは、あろうことかワンピースの軍服をたくし上げ、露わになったエロティックなデザインの下着を片足だけ脱ぎ、太ももにひっつけた。

そしてムワツと香り立つ、丸見えになった女蜜の入り口を、ゆつくりと撫でながら、その十分に愛蜜で湿った中心に、指を突きいれ、前後に動かし、自慰を始めたのだ。

（こ、こいつっ。俺に見せつけるようにさっきから……っ。でもあのマ○コに俺は童貞を奪われたんだよな。くっ、なんてエロいおっぱいだ。ポリウムは足りないが、形が俺好みのドストライクな丸みだ。ダメだ、チンポが感じるっ。ガチガチにな……るううっ！）

Sの快感を知った美しくも艶やかな自慰姿が、さらに下半身の快感を高めてしまう。

『おい、アレクっ。前方にロストだ。ちきしよう、ちようど道をふさいでやがる。そっちで早く排除してくれっ！』

「あ、ああっ。んふっ、わかった……。す、すぐに、くっ。撃ち抜いてやる……っ」
訓練中のアレクは、ナターシャのエロい姿ばかりに気を取られているわけにはいかない。

下半身を翳なぶられる官能を意識しながら、兵士としての敵……ダミーロストを撃ち抜かなければならないのだ。

（くっ、これだけの快感。それがすべて強力な魔力……っ！ 魔力量は圧倒的はずなんだ。集中、集中……っ）

ペニスが快感でビクつくたびに、身体中が大量のマナで満たされていくのを感じる。まさに感じれば感じるほど強くなる——。あとはその才能を、コントロールするだけだ。

「じゅるるっ、ちゅるううっ！ ふっ、舐めるだけではぬるいだろう？ やはりチンポはしごかれるのが一番感じるようだな。そおら、わたしのオナニーの音もたつぷりと聞かせてやるぞよ」

一キロほど先の熊型ロストに狙いを定めようとしているアレクを、あざ笑うかのように、ナターシャは唇を一気にすぼめ、グングンッ！ と首を前後に動かしながら、アレクの勃起肉棒を抜き立ててくる。

おまけに熟した女穴に突き込んだ指の速度を上げ、ジュブジュブという、彼女自身のいやらしいオナニー音を、より強く大きく響かせてくるのだ。

（なっ?! あっ、ああっつ！ これ、まるで口マ○コだっ！ やべえっ、本物のマ○コみたい、チンポ気持ちいいっつ！ この女、ふざけやがって……これじゃ狙いどころじゃ……あああっつ！）



いわゆる顔面騎乗位の姿勢で、ナターシャに跨がられているアレク。

ナターシャのほどよい大きさでありながら、破格の弾力と柔らかさを併せ持つ絶品のヒップが、顔面に完全に密着し、女性上位のクンニリングスを強いられている。

「お、ああっつ。これが顔面騎乗位かっ！ やべえ、息が苦しくて……ああっ、射精管理とは別の意味でナターシャに支配されてる感覚になる……っ。興奮する……っ。この体位、めちやくちや気持ちいいぞおっつ！」

すでに完全にM属性に目覚めているアレクは、男性に対する恥辱行為である顔面騎乗位を、心から悦んで受け入れていた。

「はあはあ、ふふっ。お前がいつ目覚めてもいいようにと、最高にエッチな下着を選んでおいた甲斐があつたな。どうだ、アレク。息苦しいだろう？ その中で舐めるわたしのマ○コ……ああんっ、気持ちよくてたまらないだろう？」

「た、たまりませんっ、特佐っつ！ んじゆるっ、ふむっ、じゆるるうっつ！ ああ、なんてエロい下着……いつつ。あつ、ペロペロっ。下品すぎてたまりませんっつ！ お似合いです、特佐っつ！ ああつ、息が苦しい……でも気持ちいいです……っつ！」

自分はずくづくマゾの変態に堕ちてしまったと、アレクは思う。

色っぽい黒のショーツのせいで、息苦しさが増す上に、その男を誘うような蝶柄レースの入った、エロエロのデザインは、視覚的にもたまらないものだ。

なにせ両目から数センチも離れていない位置で、ナターシャのぷりっぷりのお尻と、その艶やかなヒップラインを覆っている黒い下着が、上下左右に揺れ動くのだ。

それだけでも、興奮度は数十倍にはね上がるが、顔面騎乗位の真骨頂である強制クンニが、さらにアレクのマゾ快樂に火を点ける。

「んじゆるつつつ！　じゅぶううつつ！　ちゆるちゆるつつ！　ああつ、ふごおおつつ！　おつ、ああつ……い、息が……んじゅむううつつ！　お、ああつつ！　じゆるじゆるううつつ！」

顔面騎乗位では、女性側のお尻が、男性の顔を文字通り押しつぶすことも可能である。

尻の圧迫感のさじ加減を、跨がっているナターシャが完全に握っていることで、ナターシャの気分次第で、呼吸の難易度がまるで変わってくるのだ。

（ああつつ、密着されると息ができないけど……マ、マ○コを思い切り舐められる……つつ！　たまんねえつ、ナターシャの発情マ○コ汁つ、美味すぎるっ。おお、ああつ、でも息ができない……窒息するつつ！　ああおつ、もつと舐めないと……おおつ！）

射精以上に切実な、生き物としての呼吸の手綱を、ナターシャに握られていることで、今まで以上のゾクゾクした被虐感を覚えてしまう。

「ほら、どうしたアレク？　もつとマ○コを嘗め回して、わたしを気持ちよくさせないと……ああんっ、尻を上げてやらんぞ？　女の尻の下で窒息したなど……皇国の兵士として、



笑い話にもならんよなあつ？ あはあつ、もつと強く吸えつつ！ 舌をマ○コ奥まで……んはっ、ああっ……そこ、い……イイッ！」

先日のアレク主導のクンニと違い、ナターシャは自らの快楽を、文字通り尻に敷いたアレクに向けて、強く自己主張してくる。

もつと激しく、奥まで舐めてほしいと思えば、ギユウウツツ！ と窒息しかねない強さでお尻を顔面に押しつけてくる。

逆に、もつとじっくりとクンニの快感を味わいたいときは、どれだけアレクが舐めまくりたいと思っても、スツと腰を上げてくる。

雄の劣情を完全にあざ笑うかのようなSMプレイだが、アレク、そしてナターシャの二人にはこういったセックスがベストなのだ。

「おぶううつつ！ じゅずりゆりゆううつつ！ ふ〜、ふ〜~~~~つつ。べろべろつつつ！ ちゅちゅううつつ！ おおうつ、ナヒヤーヒヤとくしゃつつ！ んじゆるりゅううつつ！ ナヒヤーヒヤあああつつつ！」

（う、あああつつ。もうどれくらい尻を押しつけてるんだあつつ!! ああつ、俺の息がナターシャの汗と愛蜜に混ざって、すげえエロい匂いだ。ふうふううつつ、ずつと嗅いでいたい……けど、息がもう限界だつ！ 死ぬつつ、ナターシャああつつ、本当に尻で窒息するううつつ！）

病み上がりの身体が、数分間もまともに呼吸させてもらえないことで、全身が痺れていく。

しかしその切迫した状況にあつて、ドM快楽を発揮するチンポだけは、ビキビキにきつく勃起し続けている。

「んはああつ、いいぞおつ。チンポが勃起しまくっているつ。魔力がキンタマに溜まっているぞ、アレクつ！ はあ、んあああつ！ やっぱりお前のクンニは最高だ。あつ、んひうつ！ もう少し……もう少し我慢しろつ。はああんつ、わたしのマ○コも、お前の舌で……くひいいんつ！ キュンキュンしてる……ううつ！」

ナターシャは、お尻をどけるどころか、さらに体重をかけて、アレクの顔面にヒップ、そして完全に発情している淫らな女心を、ズンツツツ！ ギュウウウツツツ！ と押しつけてきた。

パツクリと開ききった肉ビラが、まるで淫らな食虫植物のように、アレクの口を余さず包み込む。

口と鼻いっぱいにナターシャの愛蜜と汗の混ざり合った、まろやかでいて香しい雌の味と匂いが広がっていく。

（はっ、あふううつっ！ いくら俺がマゾだから……息ができないと……つ。でも、んはあつ、完全密着マ○コに、舌がチンポみたいに食い締められて……おおつ、すごすぎ

るっつ！ ナターシャの本気汁、美味すぎいいっつ！　こんなのチンポ立っつ！　空息しかけてるのに……気持ちいいっつ！

アレクの顔は、酸素を求めて真っ赤になっているが、その悲壮感がすべて、たまらないMの快感に変換され、股間のペニスとギンギンに勃起していた。

肉棒の代わりに肉壺に突き入れられた舌先を、激しく前後左右に動かすと、無数の肉ヒダが舌を包み、なんともいえない柔らかさと温かさを感じる。

溢れるのが止まらない愛蜜で、顎がドロドロになりながらもジュルルッ！　とすすり上げる様子は、まるで自分がハチミツを舐める熊にでもなったような感覚だ。

「あつ、ふああんっ！　ああ、こんなにチンポを大きくして……っ。舐めているだけでは足りないだろう？　扱いてやるぞ、アレク。んあつ、だからわたしをもっと気持ちよく……するんだっ！　はあ、あはあんっ。イクときは一緒に……っ、あひいんっつ！」

ジュルジュルッ！　ズチュズチュッ！

ナターシャは顔面騎乗位で、お尻をアレクに押しつけたまま、そのビキビキに勃起した逸物に右手を伸ばす。

ぶくつと限界寸前まで膨れ上がった肉竿を、Sっぽくギュッと握り、自らの性的興奮の高まりに合わせ、ジュコジュコッ！　と猛烈な手淫を開始する。

「ぐぶうううっつ！　おああっつ、ふっ、ふうううっつ！　んぐううっつ！　ナターヒャ：

…んじゆるずぶううつつ！　じゆるじゆるつつ！　べろべろおおつつ！」
勃起ペニスを扱かれた瞬間、アレクの快樂雄本能が沸騰したように膨れ上がり、腰がビクンッ！　と大きくはねる。

ナターシャのマ○コの匂い、そして顔面に尻を押しつけられるという恥辱マゾ快樂、そこへさらに肉棒への手コキという直接的な雄の快感が重なって、アレクの興奮が一気に熱を帯びていく。

（おおおああつつ！　これ…一週間ぶりのチンポの刺激つつ！　しかもナターシャの手コキだぞっ!?　強烈すぎるつつ！　くおおつつ！　たまらねえつつ！　顔面騎乗位プレイ、真正マゾの俺にとっては最高すぎるぜええつつ！）

つい数十分前まで、意識を失って生死の境をさまよっていたとは思えない、自らの欲情ぶりに、アレクはより一層激しいクンニで、ナターシャの雌花を嘗め回す。

「じゆるじゆるつつ！　んふううつつ！　べろべろおおつつ。ちゅっ、ちゅちゅうつつ！　はっはあつつ！　んじゅちゆるつつ！　べろおおつつ！」

圧着してくるナターシャのお尻に、むしろ自分からさらに顔を押しつけ、恥辱のマゾ快感を解放する。

黒いレースのサワサワした触感と、蒸れた雌の匂いに鼻息を荒くしながら、ヒクヒクとエロティックに震える官能の窟穴を、舌で必死に刺激した。

「んあつつつ、はあんつつ！アレクうつ！あつ、はああつ。そうだ、それでいいつ。んふうつ、チンポからすごいマナの高まりを感じるぞつ！あひうつつつ、わたしのお尻に敷かれて感じるんだつ！あつひいいんつ！あつ、あああつつ！クルウツ、もうすぐクルううつつ！」

舌を入れたナターシャの膣がギチュギチュツとその食い締めを強めてくる。

溢れ出るラブジュースの味も、酸っぱさが抜け、だんだんとしょっぱい感じに変わってきていた。

（ナターシャつ、もうすぐイクのかつつ!! ああつつ、俺のチンポもイクツツ！い、一緒にイカせてやるつつ！ナターシャと一緒に、俺もイクううつつつ！）

呼吸もペニスも限界のアレクは、舌を膣から抜き去り、トドメと言わんばかりに、前回ナターシャがクンニで最も感じた部位……膨らみきった皮剥きクリトリスに、思い切り深く口づけする。

チュツツツ、ジュジュウウツツツ！

「あつつつ、きやいいいんつつつ！はあああつつ、ク、クリイイツツ！クリトリス来たのかつ!! ああ、アレクつつ。お前もイカせてやるぞつつ！チンポから魔力ザーメン吹かせてやるつつ！あつつ、くああんつつ！あはあつつつつつ、チンポ、イケえええつつつ！」

弱点である勃起皮剥け陰核を甘噛あまがみされたナターシャは、凄まじい快感で、思わず腰が浮き上がるのを必死にこらえ、アレクの顔面にきつく尻を、そしてマ〇コと陰核を押しつけ、グリグリつと腰を動かす。

さらに右手で握った淫棒の亀頭から裏筋にかけての、ペニスで最も敏感なところを、短い手淫のストロークで徹底的に扱きあげ、間接的な禁欲生活を送っていたアレクの男根を、久しぶりの射精絶頂へとゲンゲンと誘っていく。

「あつつ、ああつつ。先走り汁がこんなに手のひらにつ。なんて浅ましいんだ。ふふ、さすがわたしが見込んだ変態だな。はああんつつ、チンポがビクビクいつているぞ？ くふうつつ、イクんだ、アレクっ！ さつさとイって、早く魔力を回復させろつつ！」

「イ、イエフمامウウツ！ イエシユمامツツ！ お、んふくくくつつ、イエスマムツツツツ！ んじゆるりゆううつつつ！」

ナターシャのヒップの顔面騎乗によって、呼吸困難に陥りながらも、アレクはありったけの雄本能で、可愛らしい陰核を刺激した。

剥き出しのピンク色の突起に、軽く歯を立て、その状態で思い切り口をすぼめ、ジュゾゾオオツツ！ と吸い立てる。

吸われた陰核は、ナターシャの腰のようにビクビクビクウウツツ！ と口の中で震えあがり、すさまじいばかりの快感電流を、ナターシャに送り込んだ。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>